SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

両大戦間期のポール・ヴァレリーにおける「精神」の概念

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 静岡大学人文社会科学部
	公開日: 2021-01-27
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 安永, 愛
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027870

両大戦間期のポール・ヴァレリーにおける「精神」の概念

安　永　　愛

はじめに

ポール・ヴァレリー（1871－1945）の人生は大きく二つに分かれる。無名に等しいサラリーマンから第三共和政フランスを代表する詩人・知識人へ。画期となったのは1917年に発表された長編詩『若きパルク』*La Jeune Parque*の成功であった。そのように文壇の歴史には記される。とはいえ無名時代のヴァレリーが「無」であったわけではない。ヴァレリーは営々と毎朝２時間ほどを思索と執筆にあて、公表するあてもなく書き溜めていた膨大なテクストは、彼の死後『カイエ』として公開されることになる。

ヴァレリーが詩人として文壇に華々しい登場を果たし得たのは、彼自身の意図というより、時代と社会による要請であったと見える。作品を世に問おうとするそぶりも見せないヴァレリーに文壇デビューの直接のきっかけを与えたのは、大学時代から親交を結んでいた詩人のピエール・ルイスであり作家のアンドレ・ジッドであったが、およそ一般受けとは無縁なこの難解な512行の長編詩が好評を得たのは、成熟した知性を有した読者が一定数存在してのことである。ヴァレリーの長編詩『若きパルク』の成功には、フランス17世紀以来の伝統であるサロンの文化も与っている。ことに十分な閑暇と資力と教養を備えた女性たちの存在がヴァレリーの文壇的成功を後押ししたのは無視し得ない。

ヴァレリーは着想から５年の時間をかけて『若きパルク』を彫琢して行ったのだが、詩作の間に第一次世界大戦の勃発という事態があり、年齢的にも体力的にも従軍の叶わなかったヴァレリーは、詩作によって祖国の為になる最上のこと、すなわち「フランス語の墓標を建てる」ことを実践しようと考えたのであった。ヴァレリーは危機の時代に召喚された詩人、そのような巡り合わせにあった詩人であり知識人である。長編詩『若きパルク』は女性を主人公とし、身体と精神を描く香気高い韻文詩であるが、この詩人に真贋を見抜く力、文化

や文明を見通す力を見て取った者たちから、ヴァレリーには種々の原稿依頼が寄せられることになる。こうした力学により、両大戦間期にヴァレリーはいくつかの文明論的テクストを残すことになった。

本稿においては、両大戦間に書かれたヴァレリーの文明論的テクストの主要テーマの一つである「精神」espritの意義に焦点を当てる。ことに、アカデミー・フランセーズ会員、地中海研究所所長、国際連盟知的協力委員会議長など、数々の要職を引き受けていたヴァレリーが、公的な場で「精神」の語により何を伝えようとしていたのか明らかにしていきたい。

1．第一次世界大戦の総括としての評論「精神の危機」(1919年)

詩人ヴァレリーの誕生は第一次世界大戦の危機とともにあり、また、ヴァレリーの最初の本格的文明論は、第一次世界大戦の総括ともいうべき「精神の危機」[1]であった。フランス語で第一次世界大戦はLa Grande guerre「大戦争」と呼ばれる。欧州全域を巻き込んだ未曾有の近代戦による人心の荒廃は激しく、ベルエポックの夢が断ち切られたその文明的な痛み、何より犠牲の規模に鑑み、第二次世界大戦をも凌ぐ惨事として受け止められている。1918年にはシュペングラーが大著『西欧の没落』を発表し、ヨーロッパ全域にペシミズムが蔓延する中、イギリスの雑誌『アシニーアム』編集者から請われて書いたのが「精神の危機」である。第一次世界大戦明けの1919年４月に同誌に英文で掲載され、同年、フランス語原文が « La Crise de l'Esprit » のタイトルで NRF誌[2]の巻頭に掲載された。

時代の危機意識に鋭敏に反応した当評論は、ヨーロッパ文明発展の原動力の核がesprit「精神」であると論じ、またそれが没落の運命にあることを憂えるものであった。評論には世界におけるヨーロッパ文明の優位への自負と、第一次世界大戦による破壊によりその優位が揺るがせられるのではないかとの憂慮が見て取れる。

「ヨーロッパはアジアの小さな岬に還元されてしまうのだろうか」[3]とのヴァレリーの本評論の文面を意地悪く読めば、鼻持ちならないヨーロッパ文明優位論とも言える。しかし、この「ヨーロッパ中心主義」「ヨーロッパ優位論」的な部

---

[1] Paul Valéry *Œuvres I*, Gallimard, 1957. pp.981-1014.
[2] *La Nouvelle revue française*
[3] Paul Valéry, *Op.cit.*

分を捨象して、様々な文明に当てはまる「精神」の機能という観点から考察するとき、この評論の要諦が見て取れるのではないか。ヨーロッパの優位云々の問題に先立ってヴァレリーは、私的思索と鍛錬の記録である『カイエ』にCEMという記号により、彼独自の概念図式を素描していた。CEMとはcorp＝身体、esprit＝精神、monde＝世界 のそれぞれのフランス語の単語の頭文字を取ったものである。シンプルな図式であるが、世界と身体をつなぐものとしてesprit「精神」が想定されている。こうした思考のベースがあってこその評論なのである。

恒川邦夫は、この評論「精神の危機」に現れた「精神」の語の使用頻度と意味領域を邦訳・英訳・独訳とも参照しながら、その多義性について指摘している。「精神の危機」の仏語原文において、espritの語は13回使用されており、日本語訳では「頭脳」と訳した５番目の訳を例外として、すべて「精神」で訳されており、英語ではmindが大勢を占め、独訳ではGeistが大勢を占めているという[4]。

邦訳において「精神」の語を対応させているフランス語のespritの語の意味領域を一般的な辞書でたどると、まず物質的な意味として「息」「息吹」「気」「揮発性物質」「酒精」があり、非物質的な意味としては「一般的思考原理」「知的生活の原理、悟性、知性」「団体精神、帰属精神」「魂」「天才」「霊」などが挙げられている[5]。根底には、キリスト教の創世記における神の息吹のニュアンスがあり、三位一体を表す「父と子と聖霊と」の「聖霊」に対応するフランス語はSaint-Espritである。フランス語のespritは日本語の「精神」の語だけでは捉えられないニュアンスも含み混んでいることに注意が必要である[6]。またespritは集団的な概念として使用されることがある一方、突出した個人、共同体の中の

---

[4] 恒川邦夫「ヴァレリーにおける〈精神〉の意味」(三浦信孝・塚本昌則編 『ヴァレリーにおける詩と芸術』水声社、2018年、p.39)

[5] *Le grand Robert* de *la langue française*, 2001.

[6] ちなみにフランス語のespritの音訳である日本語の「エスプリ」はフランス語の原語の意味と重なりながらも、意味領域の一部のみが突出した形で取り込まれている。『日本大百科全書』の「エスプリ」の項には以下のように記されている。
「精神、機知、才気。本来「肉体」に対しての「精神」の意味であるが、一般にはフランス人特有の機知のことをさすようになった。明晰さこそフランス的であるというように、エスプリも明晰、直截で、間髪を入れず、ときには人の肺腑をえぐるような鋭さをもった表現であり、しかも理知的であることが理想である。エスプリはまた、その矢面にたった人が相手のことばを上回る機知をもってやり返すときに真価が出るのであって、笑って答えなければ愚鈍とみられてしまう。ユーモアが自己を客体化し婉曲な表現となることが多いのに対して、エスプリはあくまでも主観的で、遠慮や気どりを排斥した明快さに特色がある。」[船戸英夫]

最高峰の才能をも指す言葉でもある。ヴァレリーの「精神の危機」の評論におけるespritは、こうした辞書に掲げられている複層的な語義を背後に響かせている。

恒川が指摘する通り、日本語の「精神」の語には、現実といくらか乖離した強引な理念・理想追求の姿勢といった、より意図的・意志的な傾斜がある[7]が、フランス語espritにはそのようなニュアンスはない。恒川の言葉を借りるならば「人間におのずから備わった知性・理性の機能の発動ないしは涵養といった機能主義的な把握」[8]がフランス語のespritの語の中核である。また、日本語の辞書において「精神」の語には「知性」の語義が立てられていないが、フランス語のespritにおいて「知性」は意味領域の中核にあると言って良い。若き日のヴァレリーは、全ての権威や曖昧なものを拒絶し、「知性」intellecteを唯一の偶像として選択するのだが、「精神の危機」で論じられている「精神」espritは、限りなく「知性」に近いものとして捉えられなければならない。加えて、ヴァレリーの思考体系において「世界」と「身体」とを結ぶインターフェイスとしてリアルな存在感を纏っている言葉であり概念であることに留意したい。

2．アカデミー・フランセーズの機能と「精神」

多義的なespritの語を鍵概念として執筆され、1919年に発表された評論「精神の危機」は文明論者としてのヴァレリーの誕生を画すものになった。そして1922年、ヴァレリーが秘書として仕えていたアッバス通信社社長エドュアール・ルベイの死去により、ヴァレリーはサラリーマンとしての生活を終え、執筆と講演をたつきとするに至る。毎朝の『カイエ』の執筆は無名時代と変わらず続けられるが、生計につながるのは依頼原稿であり依頼講演である。グラン・ブルジョワではないものの、凱旋門にほど近いパリ16区のブルジョワ界隈で妻子を養う身であったヴァレリーは、否応無く様々な「依頼」「要望」に応えていくことになる。思いもかけないテーマの依頼がしばしばだったが、長年の『カイエ』執筆の習慣によってヴァレリーには相当な知的ストックと言語表現能力が培われており、多様な依頼に応えることができた。やがて、ヴァレリーにはアカデミー・フランセーズ会員への道が開かれることになる。

アカデミー・フランセーズとは、王室秘書のヴァランタン・コンラールの私

[7] 前掲論文「ヴァレリーにおける〈精神〉の意味」41頁。
[8] 同上。

邸での会合を起源とし、ルイ13世治下の1635年に宰相リシュリューにより正式に設立された組織である。フランス語の擁護と洗練を旨とし、フランス語の辞書の編纂を主たる任務としている。会員は各界の識者からなる40名で、任期は終身。そのため会員はimmortel（不死の者）と呼ばれる。会員死去とともに新会員が任命されるシステムである。フランス革命直後の10数年の混乱期をのぞき、今日に至るまで営々と活動が続けられ、アカデミー・フランセーズ編纂の辞書は現在第９版である。辞書の編纂の他、メセナ的な役割も担っており、いくつかの文学賞の授与や、奨学金に関わる援助も行っている。フロベールは『紋切型辞典』[9]に「アカデミー・フランセーズ」の項目を設け「誹謗すべし。しかし、できるものならその一員になるよう努めるべし」と皮肉っているが、フランスの文化の良識の試金石とも言うべき伝統ある組織である。

若き日のヴァレリーは、「知性」以外のあらゆる権威や偶像を破壊する斬新な人物像を「テスト氏」連作に刻み込んでいたが、1925年、この「権威」と「伝統」ある組織の会員になることを選ぶ。周囲の推挙あってのことである。

この偶像破壊の精神とアカデミー入りとは、一人の人間の中でどのように織り合わされているのだろうか。「テスト氏」は所詮、若気の至りによる造形であり、ヴァレリーは後年、権威や名声の罠にはめられたのだ、として唾棄することもできよう[10]。しかし、ヴァレリーのアカデミーとの関わりをつぶさに見てみると、それは一面的すぎる考えではないかと思われてくる。

ヴァレリーはアカデミー・フランセーズ創設300年を記念して、1935年に「アカデミーの機能と神秘」[11]と題した講演を行っている。この講演録には、精神の自由と制度、自由と権威の一筋縄ではいかない関係が記されている。

---

[9] Gustave Flaubert, *Dictionnaire des idées reçues*, 1911. この辞典は、フローベールの未完の遺作となった小説『ブヴァールとペキュシェ』に収められる予定のものであった。フランスのブルジョワがいかにも口にしそうなこと、そのように口にしておけば悪い顔はされないか、あるいは苦笑の種になるといった内容を辞書的に掲載したものである。フローベール自身の言葉とも、特定の誰かの発言というのでもない、第二帝政期のフランスのブルジョワの口吻の、フローベール流シニシズムの洗礼を経た自由間接話法の産物である。

[10]「テスト氏」連作を絶賛し、その禁欲的な「純粋自我」の形象に魅了されていたアンドレ・ブルトンは、1914年、18歳の頃、ヴァレリーの自宅を訪問する。当時ヴァレリーは43歳であった。その後、二人の交流は続くが、1924年にブルトンは『シュルレアリスム宣言』を発表し、新しい芸術・文学運動のリーダーとして活動を始め、ヴァレリーとは次第に疎遠となる。ヴァレリーのアカデミー入りはブルトンの幻滅を決定的なものにした。1927年、ヴァレリーがアカデミー入会演説を行ったその日に、ブルトンはヴァレリーから貰った手紙を全て古本屋に売却している。（松浦寿輝「ヴァレリーとブルトン―思考のエロス」『ヴァレリーにおける詩と芸術』水声社、2018年、86－87頁参照）。

[11] Paul Valéry *Œuvres II*, Gallimard, 1960, p.1119.

ヴァレリーはこの講演において、アカデミー・フランセーズ300歳というのは、己れに立ち返るのにふさわしい年齢であり、自らの本質・価値・美徳・弱点を自ら考えることのできるタイミングであると述べたのち、逆説あるいは強調の接続詞であるmaisではじめ、espritの語を主語として「ところが精神（esprit）が我らの著名なる「院」に目を据え、そちらに注意を向けようとするや否や、たちまちある種の神秘mystèreの感情を見出すのだ」[12]と述べている。espritを明晰性、確実性と結びついたものとする見方からすると、espritがアカデミー・フランセーズという団体に「神秘」の感情を見出すというのは、意外の感を与える。しかも、espritという抽象名詞が擬人化されてもいる。

ヴァレリーはアカデミー・フランセーズが知の領域に寄与し、「精神」の創造作用の発達を奨励していることを確認した上で、アカデミー・フランセーズがフランス語の辞書の編纂、文化的功績の表彰の仕事をする団体にとどまるものでないことを指摘する。ヴァレリーはアカデミー・フランセーズ会員であるということはどのようなことかについては定義できず、その定義不可能性こそが、アカデミーの魔力であり、世への存在共鳴、浸透のあり方だと述べる[13]。

辞書の編纂と文化的功績の表彰という職務に当たるという、それだけの機能にとどまるものではないのがアカデミーであり、そのアカデミー・フランセーズの魔力と神秘と超越性は、会員の選択の自由度の幅によるとヴァレリーは指摘する。ヴァレリーによれば、会員が文学者に限定されるものでないこと、いかなる特定の学問にも限定的されぬことがアカデミー・フランセーズの魅力である。アカデミー・フランセーズ会員が様々な職業を持つ人間であり、そこで成立する哲学者と軍人、詩人と高僧、歴史家と小説家あるいは劇作家、外交官と言語学者などの交渉についてヴァレリーは「自尊心を係り合わせることもなく、二つの宇宙のあいだで交差する二つの好奇心が産み出す全幅の広がりの中に展開する」[14]と評している。

実際ヴァレリーは、アカデミー・フランセーズでの数々の出会いを楽しんでいたと思われる。「詩人と高僧」という組み合わせは、アカデミー・フランセーズの歴史の中に脈々と存在し、さすがに革命後のアカデミーにおける聖職者は激減したものの、ヴァレリーの在任中、アカデミーには枢機卿ジュルジュ・グラント（歴史家であり随筆家でもある）やアンリ・ブレモン（文学史家。文学

[12] *Ibid.*, pp.1119-1127.
[13] *Ibid.*, p.1120.
[14] *Ibid.*, p.1120.

評論家でもある）という聖職者が在任しており、親しく交わっていた。

ヴァレリーは、アカデミー・フランセーズでの会員間の交流について、以下のように記している。

> 我々がそれまで無知であった、あるいは無視してしまった、あるいは辛うじて軽く触れたに過ぎなかった研究や行動の世界に属する一人の卓越する人物の全生涯の経験の成果を、我々の間では数語で摘み取ることができる。このような交換ほど、貴重で甘美なものは他に知らない。[15]

多くを語らずとも、その人物の持つ知性のエッセンス、精神のエッセンスは瞬時に伝わって来るということであろう。「甘美」であるとまで形容されているのは、知性から滲み出る気韻のようなものであろうか。

もちろん、アカデミー・フランセーズの目的は会員の親睦に尽きるものではなく、フランスの文化に深い意味で寄与するものでなければならない。ヴァレリーはこのアカデミー・フランセーズを「この実に多様な精神esprit の非常に好ましい混合体」という言葉で形容するとともに、それが「若人のように振る舞う」[16]と指摘している。ヴァレリーによれば「若人」とは、「精神の自由と判断の鋭敏明晰によってその存在を主張する存在」[17]であり、職場や家庭への配慮や、利益・昇進などに煩わされないで済み、何につけても自分の感情を流露することができ、ためらうことなく判断を下せる存在である。アカデミー・フランセーズの会員たちは、若人の時期は終えた人たちであるが、精神の自由と好奇心において若人のようであり、青年期をすぎたのちに青年のようである一群の人たちであると言うのである。ヴァレリーは「僕らは教室にいるみたいだ」[18]とアカデミー・フランセーズの会議中に囁いてきた会員の言葉を紹介している。

アカデミー会員の自由闊達さ、その精神の自在については、やはり、内部に入ってこそ初めて感じ取られるものであろう。また、そのアカデミー会員の自由な気風は、アカデミー・フランセーズが国家の一制度であり、国家の若干の補助を受けた団体でありながら、国家元首と会員の間にいかなる権力も介在しないことによっているとヴァレリーは明言する。アカデミーの独立性がないが

---

[15] *Ibid.*, p.1121.
[16] *Ibid.*, p.1122.
[17] *Ibid.*, p.1122.
[18] *Ibid.*, p.1122.

しろにされたのは、300年の歴史の中で、革命政府と王政復古の政府の下にあった時だけであったとヴァレリーは振り返っている。そうした例外を除き、アカデミーには反政府的な会員をも受け入れており、アカデミーの会議における演説において、政府への皮肉や批判が欠けることはなかったことにも言及がなされている。

アカデミーはフランス専制政治の残滓的な制度であると認める一方、フランスの産んだ最も自由な精神の中で最も著名な者が属してきたことについて、ヴァレリーは言及を忘れない。このようにヴァレリーは、アカデミー・フランセーズ300周年に寄せて、この国家組織のパラドクサルかつドラマに満ちたありようを言祝いでいる。ヴァレリーがアカデミーに「神秘」がある、と述べているのは、会員のそれぞれが、特定の専門の職務において秀でていたばかりでなく、自由闊達な精神を持ち、巨大な国家権力との緊張関係を保ちつつ、知的な勇気を発揮してきた歴史と、そこから醸し出される栄光によると言えるだろう。

アカデミーの「神秘」に言及したヴァレリーは、その奥義が、次に来る時代への漠然とした期待の性質につながるものではないかと自問するに至っている[19]。そして、現代社会のあまねき無秩序や不安定性に対して、連続性、持続性、釣り合い、平静などが高い価値を持つのであり、そうした価値を担い得るのがアカデミーであると暗に示唆している。講演録「アカデミーの機能と神秘」はヴァレリーの理想のアカデミー像で締めくくられる。

> 人は、そこに人類の文化の最良のものに対する心づかいが保存されているような離れ小島を夢想する。実行ある権力を持たずとも、ただその存在によってだけでも、また精神の自由の完璧性の中に身を落ち着けたこれら数人の人びとの感情や意見の中から公衆に流布されるものによってだけでも、この観察と複合的反省と予見の中央機関は、定義しがたいが常に変動のない作用を働かせるであろう。一種の卓越した良心が都市を見守ることになろう。

このように、何より精神の自由に根ざした組織の可能性をヴァレリーは信じている。ヴァレリーはそのような組織としていくことの各会員の責任に言及してこの講演を締めくくっているが、権威と伝統の厚みの中にあって精神の自由

---

[19] *Ibid.*, p.1126.

な働きに信を置く姿勢が見事に現れた講演である。ヴァレリーのアカデミー入会に俗物性を見て取り冷笑を浴びせた人びとが存在したのは事実だが、ヴァレリーはアカデミー会員としての推挙を、単に個人的名誉として捉えるのみでなく、時代に召喚されたこととして使命感を持って捉えていたのではないだろうか。第一次世界大戦によるヨーロッパ世界の瓦解と同時代の社会の無秩序への防波堤となる精神をアカデミー・フランセーズに見て取ったからこそ、失笑を買おうとも、入会に奔走し、その職を全うしたのではないだろうか。

3.「精神の自由」をめぐって

1930年代に入り、ドイツにおいてナチズムが勃興し、イタリアにおけるムッソリーニの独裁、スペインでのフランコ政権のファシズムなどの状況の中で、ヴァレリーは何より精神の自由が蹂躙されていることに危機感を持っていた。そうした状況の中で1939年、ヴァレリーは「精神の自由」と題した講演を行っている。ヴァレリーは、1922年にアッバス通信社社長秘書の仕事を失ったのち、執筆・講演の依頼に応える日々が続いていたが、ヴァレリーの活動は、フランス国内に止まらず、ヨーロッパ各地、さらにはアルジェリアでの講演も行う身となっていた。ヴァレリーが迎えられるのは、各国大使館、大学といった組織であり、いずれも知的な人々を前にしての講演であり、文章の形で練り上げられたものが厳かに読み上げられるスタイルである。

ヴァレリーの講演録は、聴衆の存在を十分に意識した語り口を持っている。この「精神の自由」と題した講演においては、「精神」という言葉の意義、そして「精神の自由」というコンセプトが丁寧に説明されている。

この講演からまず伺われるのは、ヴァレリーの強い時代意識であり、「精神」の価値の下落を目の当たりにしているという危機意識である。ヴァレリーの講演は、以下のように始まる。

> 人々の精神に「精神」の運命について、すなわち彼ら自身の運命的についての関心を呼び起すことが、今日必要だということは、いや単に必要なだけでなく急務であるということは、一つの時代の徴であり、しかもあまり良い徴ではありません。[20]

[20] *Ibid.*, p.1077.

講演のテーマが喫緊のものであり、そうしたテーマを取り上げざるを得ないこと自体に現れている時代の危機を聴衆に伝える冒頭部である。ヴァレリーはこれに続けて、「精神」の運命について語ることを必要と感じているのが「ある一定の年齢に達した人間」であると指摘している。ヴァレリー自身は特定していないものの、それは暗黙のうちに第一次世界大戦前の世界、ベルエポックの時代の雰囲気を知っている人間ということを指していると考えられる。この講演を行った時、ヴァレリーは60代の半ばに達していたが、「ある一定の年齢に達した人間」を冗談めかしてパラフレーズし「頭の働きの一定し過ぎてしまった人間」と定義し直していることからも、そのように推察して良いだろう。

ヴァレリーがこの講演で指摘しているのは「精神」の価値の下落という事態である。1919年に発表された評論「精神の危機」で描かれていた問題の基本線は二十年ほどのちの講演においても継承されていると言える。ヴァレリーは「精神」というものが信用されていた時代、そういう人々が確かに存在していた時代について言及する。ヴァレリーの若かりし頃と言えるのであろうが、「精神」という言葉で「ある一つの活動力」を指していたと指摘している。すなわち、単なる通常の生活の正常な機能や個体の維持といった次元を超えた可能性、欲望、精力を「精神」という言葉が担っていたという。動物の一種族である人間が、動物と異なっているのは、まさに、こうした生命や個体の維持という必要を超えた余剰の部分であり、「精神」はそうした活動力につけられた名称だというわけである。しかし、この単純な生命維持と、精神の活動とは、いずれも身体を介している点で共通性を持つとヴァレリーは指摘している。

さらにヴァレリーは「精神」を一つの価値と見て、それを「金」や「有価証券」と同じく、「相場」において存立するものであるとの見方を提示する。「精神」を「価値」のカテゴリーで捉えることによって経済現象と精神的事象との共通点があぶり出されてくるわけだが、ヴァレリーは、そもそも経済活動・交易の源泉には「言葉」があり「精神」があると喝破する。古来、交易の盛んな地域である地中海沿岸、ライン河流域を具体例として挙げ、経済の発展と文化発展が相携えていたのであり、商業の発展と交易の自由が精神の自由に繋がっている事実にヴァレリーは言及している。そして、文明とは資本であり、経済的現象も精神的事象も同じ活動力の中にあり、そうした交易の自由や交流の豊かさがない状況下では文化の豊かさも実現されなかったと指摘している。

しかし、交易が頻繁であり情報の伝達が盛んである現代は、その目まぐるしさゆえに、文化の醸成を妨げているとヴァレリーは見ている。「現代の生活は、

ある自然な資源のように蓄積されねばならぬ文化の財産を、人々の精神の内部にあたかも幾層もの地層が沈澱するようにして形成されねばならない文化の資本を、あらゆる交通、通信手段の過度の発達によって伝播され激成された社会全般の騒乱の中に投げ込んでしまう」[21]とヴァレリーは表現している。

また、現代は「目利き」や「愛好家」が消滅した時代だとヴァレリーは言う。彼らは「あらゆる利害関係を超越し、最も熱烈に知性と芸術に生きること」[22]を存在理由とするような人々であり、「精神という価値、精神という資本を着実に築くのに、芸術家や科学者などの創造者自身にも増して寄与してきた」[23]とまでヴァレリーは述べている。こうした「目利き」「愛好家」の存在あってこそ、芸術家は思う存分に制作に励み、持続に耐えるものを時間と労苦をかけ作り上げてきたのである。何事も手っ取り早く運ぶ現代においては、そうした持続に耐えるものが作られることは難しい。それがヴァレリーの痛感するところであった。そうした現象は精神の真の自由の減少に帰結してしまう。というのも現代の生活から受ける脈略のない激烈な感覚を拒否し、超脱することが、精神の自由にとっては不可欠であるからである。そのようにヴァレリーは主張する。

ヴァレリーが伝えようとする「精神の自由」とは、政治的な「自由」とは異なるものである。政治的な「自由」は、平等や主権という観念と分かち難く結びついており、政治というものは権力を獲得し保存する意思に他ならないため、権力の素材である人々の精神を束縛し、それに幻想を与えずにはいない。従って、政治と「精神の自由」とは相入れず、「自由」一般を論じることはヴァレリーの意図を超えたこととされているのである。

さらに「自由」という言葉はそもそも、なんらかの束縛が生じたときに、対照の効果によって感じ取られ、希望されるものであって、そうした束縛を感じ取ることができなくなったとき、「自由」の観念、「精神の自由」の観念も消滅してしまう。それがヴァレリーの考えであり、自身、「精神の自由」について公衆の面前で話す必要に駆られている状況自体が、時代の危機を示していると感じていたのである。このとき、ヴァレリーの念頭にあったのは、具体的には名指されてはいないものの、ナチス支配下にあったドイツである。ヴァレリーは次のように述べている。

---

[21] *Ibid.*, p.1090.
[22] *Ibid.*, p.1091.
[23] *Ibid.*, p.1091.

国境の彼方では権威ある刊行物や雑誌が（かつては生命にあふれていたのに）今では我慢ならぬ衒学の臭気に満ちた論文ばかり掲載しているのが見られます。これらの出版物は、もはやそこで精神が活気を失ってしまったことを、そして見せかけだけの知的生活を体面上やむを得ず保っていることを感じさせます。[24]

そして、この講演をヴァレリーは、フランスが文化の伝統を保存する聖堂になること、大芸術を有する卓越した文化の保存所になること、様々の思想の最高にして最大の自由を生み出したものを受け入れて保存することを切望する言葉で締めくくっている。

ナチズムの台頭やファシズムの進行に脅かされる欧州の状況を憂慮するヴァレリーが「精神」の語、そして「精神の自由」の語に託したものが、危機の意識のもとに明らかにされていると言えるであろう。

４．両大戦間のヨーロッパの政治と「精神」

以上に、両大戦間に執筆されたヴァレリーの文明論的テクストから、「精神」のテマティックに深く関わる３編を検討し、ヴァレリーが「精神」の語に込めたものについてたどってきた。

この「精神」の語は、ヴァレリーが文壇に登場し、公的な発言を期待される中で、繰り返し立ち返る基本的コンセプトになっている。ヴァレリーは両大戦間のヨーロッパの政治、とりわけ文化政策の側面で際立った役割を果たした。本節では、未だ本格的に論じられてこなかったヴァレリーのこうした側面での寄与について一瞥しておこう。一貫して「精神」のコンセプトが存在しているからである。

『若きパルク』の成功後に、ヴァレリーの元には様々な原稿や講演の依頼が殺到することなったことについて触れたが、『若きパルク』発表の翌年、ヴァレリーの知人の一人で、創設予定の国際連盟の外交委員会の書記職に任命されていた国民議会議員のアンドレ・ルベイは、報告書を書きあぐね、ヴァレリーに助けを求めた。1918年７月21日に、アンドレ・ルベイは「ぼんやりしたもの」とヴァレリーの言うメモを受け取るが、そのメモはルベイには、全ての点にお

[24] *Ibid.*, p.1098.

いて目覚しいものと映った。ヴァレリーのメモには、戦争防止を任務とするような組織創設の構想が書かれていた。実は、これが30年後に国際連合が採択することになるアイディアであり、それはまたEUの前駆とも言えるものだったのである。ヴァレリーのメモには、各国の共同予算、「小規模な各国間議会」の創設、通称規約は加盟国のみで有効であり、加盟国の排除が経済的制裁になるような仕組み、といったものも記されていた[25]。ヴァレリーのメモは、野蛮な第一次世界大戦から、皆が教訓を引き出そうとしていた最中に書かれたものである。ミシェル・ジャルティはそれがヴァレリーにとって、フランス一国を超えて、汎ヨーロッパ的な政治に目を開く思想の転換点になったと指摘している[26]。第１節で取り上げた「精神の危機」が書かれることになるのは、このメモからほどなくしてのことであった。そして、この評論がきっかけとなり、ヴァレリーのもとには国際協調に関連する様々な役職の依頼が来るようになったのである。

国際連盟に文化関連機関が設置されるのは1922年になってのことである。ジュネーヴに本部を置く知的協力委員会がそれである。初代の委員長を務めたのはベルクソンであった。この委員会は、学者、芸術家、作家の交流を推進することを任務とした。1925年にヴァレリーはこの委員会に加わり、「文芸と芸術」分科会のメンバーとなった。こうした活動の中でヴァレリーは、国境を超え錚々たる人々と交流することになる。ハンガリーの作曲家ベラ・バルトーク、イギリスの作家ゴールズワージー、ルーマニアの女性作家エレーヌ・ヴァカレスコ、トーマス・マン、そしてフランスの美術史家アンリ・フォション、ジョルジュ・デュアメル、ジュール・ロマンといった人々とヴァレリーは言葉を交わしている。

また、1927年に数学者エミール・ボレルにより設立されたヨーロッパ協力フランス委員会にもヴァレリーは協力している。さらにヨーロッパ協力連合委員会の学術部門の委員長も務め、また、1922年にカール・フォン・ローアンによってウィーンで設立された「知的連合」にもヴァレリーはメンバーとして名を連ねている。それぞれの団体には政治的な路線の違いはあったのだが、ことに1920年代においては、幅広い知識人、芸術家がこうした団体に参加していたのである。ヴァレリーが「精神」のコンセプトに深く根ざした「知的協力」の理念を

[25] 国際連合に関わるルベイからヴァレリーへの依頼と、それに対するヴァレリーの回答については、以下を参照。Valéry-Lebay, *Au miroir de l'histoire,* éd. Micheline Hontbeyrie, Gallimard, 2004, pp.340-344.

[26] Michel Jarrety « Valéry et la politique européenne de l'entre-deux- guerres » *Regards sur Paul Valéry,* Fata morgana, 2012, p.98.

定義したのが、まさにこの「知的連合」においてのことであった。1926年10月20日の同会合に招かれたヴァレリーは次のように述べている。

> 私たちのうちの幾たりかの人々――私は、精神の人々les homme de l'esprit と呼ぼうと思いますが――そうした人々とにとっては交流すること、また救い出すべき、深めるべき何かしらの意識を最高の強度と明晰さを持ってヨーロッパに仕えることが大切なのです。

さらにヴァレリーは「精神の人」という言葉について次のように敷衍する。

> 私の考える精神の人とは、知識人ということではありません。明快な表現とは言えませんが、いかに慎ましくとも精神のために生きている人のことです。下層の文化に生きていようとも、精神の運命に信を置いているのなら、その人は「精神の人」と形容される存在になるでありましょう。[27]

ヴァレリーは、国際協力の推進のためには、知識人を動かすだけでは足りないと考えていた。「精神」の命運をわがこととして注視する良識ある人々に働きかけることが大切だと考えたのである。「知的協力組織は、世論の中に存在してしない限り、存立し得ないでしょう」[28]とヴァレリーは述べている。

ヴァレリーはこうしたことを可能にするために、「様々な知的分野に所属する人々の会合を開催する」[29]ことを思いつく。1930年になると美術史家のアンリ・フォションと協力して、このアイディアを実現させていくことになる。ヴァレリーはベルリンでの知的協力委員会での自らの発言について「ものを考える人びとに及ぼされる作用は、統治する人々に作用するはずである」[30]とまとめ直している。国際連盟は、精神的連盟を前提としているのであり、精神生活を豊かにする人びとを結びつけなくてはならない、というのがヴァレリーの国際協力活動に寄せる考えであった。国際連盟の知的協力委員会の活動を可視化するためヴァレリーは、18世紀風、またグリムの文学書簡の顰に倣って「高度な知的活動で定評ある第一人者たちの間の往復書簡」を発行すること、また「人間と

---

[27] フランス国立図書館草稿部所蔵　(Naf 19127, f 7-21).
[28] Procès-verbal de la séance du 18 juillet 1928 après-midi, p.15-16. (Archives de l'UNESCO)
[29] Procès-verbal de la séance du 18 juillet 1928 après-midi, p.15-16. (Archives de l'UNESCO)
[30] *Ibid.*

文明の定義に供することのできる人物間の討議」[31]を開催することを同委員会の活動の主軸とした。

こうして発行された「往復書簡」の中でも、フロイトとアインシュタインの『なぜ戦争か？』[32]は近年フランスで復刊されている。「討議」については1932年から第２次世界大戦の勃発するまで、『文化の未来』『ヨーロッパ精神の未来』『現代人の形成』といったタイトルで発行されている。ミシェル・ジャルティは、こうした出版物としての成果もさることながら、各界の学者・科学者・芸術家が集い、ともにヨーロッパ人であることを感じること、その精神的交流が重要とヴァレリーは考えたのではないかと推察している[33]。

他にもヴァレリーの地中海研究所所長としての活動、フランスのペンクラブ会長としての活動、フランス作家同盟での活動などにも注目すべきことは多く、様々な公的な活動については稿を改めなければならない。しかし、第一次世界大戦のもたらした反省から紡がれた「精神」の概念を中核に据えたヴァレリーの思考は、両大戦間期に、フランスという共同体、またヨーロッパという知的共同体のユートピア的実践に流れ込んでいたと見ることができるだろう。

おわりに

「私の人生は他人の作品である」[34]。この言葉は、「テスト氏」に象徴される純粋自我の権化、といった先入観を自身に向けてくる人々の裏をかくかのように記されたヴァレリーの言葉である。ヴァレリーは自らの信念に悖るものでない限り、他人からの働きかけを拒まないことにしていた。20年も詩作から遠ざかっていたのに長編詩『若きパルク』を執筆することになったのも、若い頃の詩を集めて出版しないかとの旧友ピエール・ルイスからの勧めがそもそものきっかけであったし[35]、『若きパルク』が注目され、文明論者としての資質も見込まれたりすることもなければ、ヴァレリーがヨーロッパの政治（ことに文化面での）に関わることもなかったであろう。ヴァレリー自身は、「テスト氏」のごとく、

[31] Procès-verbal de la première session du Comité permanent des Lettres et Arts, 6-9 juillet 1931, pp.11-15, 24-25, 47-48. (Archives de l'UNESCO)

[32] Einstein, Albert et Freud, Sigmund, *Pourquoi la guerre ?*.trad. fr. Blaise Briod, 1933, rééd. Préfacée par Christophe David, Rivages, 2005.

[33] Michel Jarrety, *Op.cit.*, p.110.

[34] Paul Valéry, *Cahiers I*, Gallimard, 1974, p.523.

[35] 当初は古い原稿に修正を加えて出版するつもりが、作業をするうちに新たな詩を書くことを思いついたのであった。

誰にも知られることなくサラリーマンとして生き、そして誰に読まれる当てもなく『カイエ』を書く生活を続けていても不思議ではなかった。ヴァレリーには金の必要性はあったが、著名人になることや名声を得ることに関しては無欲であったように思われる。しかしヴァレリーは他者に必要とされ、依頼に応えるうちに、詩人としても、フランス第三共和制、あるいはヨーロッパを代表する知識人としても、大きな足跡を残していったのである。

とはいえ、のちの国際連合につながったヴァレリーの着想や、両大戦間にヨーロッパの文化の政治の中でヴァレリーの果たした役割については、ミシェル・ジャルティも指摘するとおり[36]十分に論じられているとは言い難い。「精神」のテーマを中核に据えるヴァレリーの思想の根本的な方法が、現実のヨーロッパの文化や政治の中でどのように機能したかのより詳細な分析については、今後の課題としたい。

[36] Michel Jarrety, *Op.cit.*, p.98.